

わたしはどこからきましたか （日向の百済王伝説）

春生会 児玉 邦彦

日本人がどこから来たかに関しては、縄文期にアジアの西・北・南の各地からやって来、弥生期に揚子江下流域や、朝鮮半島からやって来たことはほぼ定説となっている。歴史的には大分下るが、日向には百済王伝説がある。この件の真偽を考えてみたい。

日向の百済王伝説

「神門神社縁起」によると百済王貞嘉帝は、その子福智王に譲位して3年目に国内に大乱がおき、その難をさけるために福智王とともに日本へわたり、756年安芸国厳島あたりについた。しばらく滞在したが、反乱軍の追撃をおそれ2年後、筑紫へむけて船をだしたが、風波にもまれ日向国金ヶ浜（日向市）に吹き寄せられた。浜に上陸して宮居の地を占ったところ、これより山奥7～8里の神門の地が良いと出たので、そこに居を定めることとなった。

一方、福智王の船は、児湯郡蚊口浦（高鍋町）に着き、珠を投げて宮居を占ったところ、珠は18里先の火弁（ひき）現在の児湯郡木城町比木の地まで飛び、そこに宮居を構えることとなった。

しばらく安息の日々がつづいたが、百済からついに追討の軍が押しよせ帝の軍は神門近くで迎え撃ち、福智王も手兵を率いて防戦につとめ、ようやく撃退した。しかし帝はこの戦いのさなか流れ矢に当たって亡くなってしまったので、その霊をこの地の神門大明神として祀ることとした。福智王もその後、火弁（ひき）で亡くなり、火弁大神として祀られた。神門神社には貞嘉帝が持ってきたとされる壺を宝物として伝えている。

旧暦の12月18日の神門神社の例祭には、福智王を祀る比木神社から約90キロの遠路を神官・氏子にまもられたご神体の神幸がある。かつては比木神社を出発し神門神社まで5日かかり、貞嘉帝上陸の地、金ヶ浜での禊（みそぎ）や神楽奉納をはじめゆかりの地で数々の神事を行いながら18日に神門神社につき、父子2神そろっての祭りは3日間にわたって行われていた。

神門神社境内の宝物蔵には百済王伝来の壺や奈良時代の鏡などが数多く保存され、他に類をみない全国各地の寺社との特殊密接な関係をもっていると云える。奥日向の神門神社になぜこのように日本有数の伝世鏡が保有されてきたのかは明らかではない。（宮崎県の歴史散歩 1976年 山川出版 より引用）

史 実

百済（朝鮮半島南西部）が唐と新羅（朝鮮半島南東部）の連合軍に滅ぼされたのは西暦660年で、その時の百済王は義慈王であった。そして唐により長安へ流される。倭

に人質として来ており祖国の滅亡を知り、急いで帰国したのが子の豊璋であった。倭は、豊璋とともに百済復興のために援軍を送ったが、唐と新羅の連合軍に百済の白村江で惨敗した。西暦663年のことである。豊璋の弟も倭へ人質として来ており、名は善光であった。一時的に豊璋は、百済王を継承したようだが、ひそかに高句麗（北朝鮮と中国東北部）に逃亡した。高句麗も唐によって滅ぼされ、豊璋は、中国南部へ流された。

白村江で敗れたヤマト王権は、百済の残党を多数受け入れるとともに、連合軍の攻撃を恐れて防備を固めた。大宰府に水城という防塁を作ったりしたのだが、その後に新羅軍による侵略の記録はない。ただ、新羅の海賊の入寇は、対馬や北部九州等で何度かあったようである。

推 測

以上のように、日向の百済伝説は王の名前も年代も異なっている。しかし、南郷町神門神社に残された着物の縫込みは、百済の公文書その物と推定されているものがあるし、当時の奈良の銅鏡と同様のものがあるという。また、師走祭りのなかにも韓国を偲ばせるものがあるという。何よりもこの苦行に近い師走祭りを長期間に渡って続けてきたことに、伝説が単なる架空のものではないことを思わせる。

それでは百済の王統はどうなったかといえば、義慈王もしくは豊璋で途絶えたわけではなく、豊璋の弟善光によって受け継がれた。彼はヤマト王権下で百済王（クダラノコニキシ）といわれるようになったのである。いわば、倭に百済の残党の亡命政権ができたようなものである。では、善光の末裔に貞嘉・福智・華智（弟）の各王の名前があるかということそこにも出てこないのである。

豊璋の生年月日は不詳であるが、義慈王の生年より、百済に帰国したのは30代半ばではないかと思われる。彼は、倭で太安万侶の一族の娘と結婚しており、戦場に急遽ということなので家族を残しての帰国であった可能性は極めて高い。百済と倭の軍勢を残し豊璋は敵前逃亡したのだが、その子孫は肩身の狭い思いをして過ごしたであろう。その子孫等の名前の記録は無い。貞嘉・福智・華智の各王が実在とするなら豊璋の末裔である可能性がある。

西暦750年代はどんな時代かということ、奈良時代の真っ只中律令国家が出来上がったところで、権力争いが多かった。橘奈良麻呂の乱が757年に起きている。橘諸兄が権力を持っていた時、藤原仲麻呂が勢力を伸ばしてきた。諸兄が辞職した後、息子の橘奈良麻呂が謀反を起こしたのである。数百名が逮捕され多数の者が拷問により絶命したという。その時、朝廷方で逮捕尋問した者の一人として、百済王善光の子孫敬福が出てくる。彼は以前に陸奥国で金鉞を発見し、多いに朝廷に貢献している。764年には、逆に藤原仲麻呂の乱が起きている。藤原対橘の権力争いの激流の中、善光の子孫百済王敬福は運良く主流派を生き延びた。日向の百済王伝説の王の名前と漂着年数を信ずるなら、

関西で生き続けた豊璋の子孫が、権力争いに関与し、そこからはじき出され落のびたすがたが、この百済王（クダラノコニキシ）伝説と考えることができるのではないかと思う。

くだらのこにきしに関して

百済の言語は、支配階層と被支配階層によって別れており、支配階層は満州にいた扶余系の言語であったという。被支配階層は百済の前身馬韓の言語であったろう。王のことを支配階層は於羅瑕（オラク？）、被支配階層は韃吉支（コニキシ）と言ったとある。白村江で敗れて百済から倭へ逃げ落ちたのは支配階層が大半であったと思われるが、その王の呼称がヤマト王権では於羅瑕（オラク？）でなく韃吉支（コニキシ）であったのはなぜだろうか。受け入れ側のヤマト王権の内部に、百済の被支配階層の末裔が一定の勢力を持っていたということだろう。ではその被支配階層は何時倭へ渡来したかというところ、扶余族が馬韓を支配し百済となったころ、まとまりを持って逃げてきたのではないかと思う。西暦300年代の前半と思われる。百済滅亡の300年以上前のことであるが、ちょうどこの頃ヤマト王権は奈良盆地から伸展し始めたのである。朝鮮半島との交易も開始している。

『周書』百済伝 王姓は扶余氏、号は於羅瑕、民は韃吉支と呼ぶ、どちらも中華で言う王である。妻は於陸と号し、中華で言う妃である。

板橋という言語学者が、死語となっている高句麗語を地名から再現した研究では、高句麗語の語彙は古代日本語に似ているという。ある言語とある言語が類縁関係にあるというためには、文法が似ており、父・母・一・二とかいう基本語彙に類似性がなければならない。東アジアの韓国語と日本語はアルタイ語族といわれ文法的には似ているのだが、基本語彙に共通性がない。そのため、日本語と韓国語は孤立語に分類されることもある。高句麗も扶余族であるため、高句麗語と百済の支配階層の言葉は類縁関係があったと想像される。となると、古代日本語と百済の支配階層の言語が似ていることになり、ヤマト王権が義慈王の子善光を非支配階層の言葉であるクダラノコニキシ（百済王）と言ったことと不整合になる。板橋論文に対し、韓国より、論文中の高句麗の地名はかつて百済の地だったため百済語ではないかとの疑問も呈されているという。

宮崎の川南に、トロントロンという地名がある。十年くらい前だろうか郷土史家にたずねた時、かなり古いアイヌの言葉だと教わった。ヤマト王権に従わない種族として北にアイヌ、南に熊襲がいた。アイヌではなく熊襲と言うべきだったのかも知れない。熊襲は海洋系の民族ではないかとの説もあり、オーストロネシア語（台湾高砂族の諸言語、タガログ語、マレー語、インドネシア語等）かもしれない。マレーシア語の入門書をパラパラとめくった時、“トロントロン”に“下る”と言う意味があり驚いたことがある。2～

3千年の時空を隔てて互いに絶縁した言葉が同じ発音を保つとは思えないのだが。さらにトロンと二度重ねる畳語になっている点など、南アジアを思わせる。仮に“とろんとろん”という地名が室町時代の史料に載っていたとしても、室町時代の日本語として分析の対象としていいのだろうか。借用語とするか古来の日本語と判断するかさえ、困難な課題のように思える。

このコニキシの一点で、板橋論文を批判するのは甚だ心もとないが、古代日本語は馬韓語もしくは百済の被支配層の言葉に、より多く影響を受けていたのではないかと思う。百済の地を越えた遠くの高句麗よりも、海を隔てて隣接した馬韓や百済非支配層の言葉の影響を受けていると考える方が自然ではないだろうか。言葉の混交は、民族の混交でもあっただろう。

追記

渡来人がやって来たのは、応神天皇の時代で AD400 年前後だろう。百済の成立が AD300 年前半とすると、馬韓の地は一挙に百済化したようにあるが、任那滅亡の AD562 年までは、部族連合社会の馬韓が残っていたものと思う。渡来人は、新羅と百済の圧迫から逃れ、日本にやってきたようだ。千字文と論語を伝えた王仁吉師も百済より渡来したようになっているが、朝鮮半島の南西部の全羅南道出身とされており、馬韓残存勢力地にある。また、前方後円墳もこの地である。記紀の書かれた AD700 年代初期においては、任那日本府も百済も滅亡しており、馬韓残存勢力があったことが忘れられており、渡来人も百済からとなったのではないだろうか。応神天皇から雄略天皇の周辺で活躍した渡来人は、ほとんどが馬韓残存勢力で、閩閩を作りながら天皇家に遺伝子の注入が続いたものと思う。400 年代の倭の五王は、馬韓の残存勢力地が朝鮮半島南西部にあることを知っており、馬韓のことを南宋への上奏文で慕韓と言っている。馬韓残存勢力側も前方後円墳を受け入れる素地があったものと思う。王権周辺の渡来人の多くは馬韓人であったため、百済からの亡命王族を馬韓語のこにきしと呼ぶようになったのだろう。